

■ 名古屋大学における持続可能な開発のための教育(ESD)の取り組み

国連は日本政府の提唱に基づき2005年からの10年間で「国連ESDの10年」と定め、最終年の2014年11月10～12日には「ESDユネスコ世界会議」が愛知/名古屋で開催されます。

ESDとは、Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)であり、特に、高等教育におけるESDとは、持続可能な開発(以下、SD)のための高度な人材を育成することです。名古屋大学では、SDの研究・教育として、これまで、国際開発研究科、環境学研究科などを設置するとともに、アジアの国々などへの法教育、医療行政の国際協力などをしてきており、また、名古屋大学国際環境人材育成プログラム(NUGELP)などの大型の教育プログラムを実施してきています。

こうした中、名古屋大学大学院の5つの研究科(環境学、国際開発、生命農学、工学、経済学)は、2013年4月から「名古屋大学5研究科連携ESDプログラム」を開始しました。

2014年の4月には、環境学研究科に、本プログラムの運営などの機能を担う持続的共発展教育研究センターが発足しています。21世紀におけるサイエンス、ポリシー、ビジネスなどのグローバルリーダーには、持続可能な地球社会を創り出す能力が備わっていることが不可欠です。

■ 減災館の完成

2014年3月に名古屋大学減災館が完成しました。この建物は、名古屋大学における防災・減災に関する研究・教育・協働の拠点として機能するとともに、大規模災害発生時には大学としての災害対応拠点としての役割を果たすことが期待されています。

減災館では、大学における新たな防災・減災の取り組みを模索するため、屋上実験室を揺らす、分野の異なる研究者が1つの建物に居住して連携を促進させる、といったさまざまな「実験」が始まっています。ここから将来の新たな防災・減災につながるどんな斬新なアイデアが生まれ、地域の防災力向上につながっていくかで名古屋大学の防災・減災研究の真価が問われます。



■ 名古屋大学こすもす保育園の「ごみゼロ活動」について

今回、子どもたちを取り巻く身近な生活環境から、「ごみ」を意識してほしいという思いで3～5歳児クラスで「ごみゼロの日」の活動に取り組みました。手提げのビニール袋をもって、元気よく保育園を出発した子どもたちは、歩道脇や植え込みの中、溝や広場など、保育園から図書館までごみを探しながら歩いていきました。

ごみを拾う子どもたちの姿は大学内の学生や職員の方々の目に触れることとなりました。大人は普段より「ごみはごみ箱へ」という思いはあるものの、あえて意識を持って行動することは少なく、子どもたちの真剣なまなざしとごみを拾う姿から、通りすがりの大人たちが思わず立ち止まり、自分たち大人はできているだろうか?と問いかけている様子がありました。子どもたちの行動から大学内のさまざまな立場の大人がごみの対応について再認識してほしいという思いは私たち保育園スタッフがこの活動を実施した経緯の1つでもあったため、注目していただくことには意味がありました。



■ 卒業生の活躍「環境コンサルティングにて奮闘中！」

環境問題や環境保全について行政などの担当者が頭を悩ませている時、ともに考え、解決に導くお手伝いをするのが環境コンサルティングの仕事です。

一般的には、大規模開発に際しての環境アセスメントや、道路建設や河川改修などで影響を受ける希少種の保全などに環境コンサルティングが関わっていることはよく知られていると思いますが、しかし、この仕事に就いて意外だったのは、開発事業に限らず非常に幅広い分野に業務がまたがっていることです。

この仕事に就いて11年が経ち、今では大きなやりがいを感じています。一方で、相変わらず未熟で、調査結果に一喜一憂し、手前勝手なストーリーで畏にはまるのがよくあります。自然はそんなに単純ではありません。環境コンサルティングの仕事はやはり信頼が命ですから、丁寧な仕事と地道な研鑽を続けていくことで、信頼を得て、いつかは恩返しできる仕事人になりたいと思っています。



名古屋大学総長
 濱口道成

総長メッセージ

私は就任直後に、任期中に取り組むべき諸課題を濱口プランとして取りまとめ、6年間にわたりその達成に努めてまいりました。本年はいよいよその最終年度を迎えることになりました。温室効果ガス排出削減は総長就任時におけるわが国の最重要課題の1つであり、私は当時の国家公約を上回るCO₂排出量の削減目標を設定し、その実現に向けて全学を挙げて取り組んでまいりました。その結果、1年前倒しで目標を達成することができました。

未来に向けての人口の急減は、わが国の大学に大きな影を落としております。名古屋大学としてこの難局を乗り越えるために、濱口プランで、「名古屋大学からNagoya Universityへ」を掲げリーディング大学院プログラムやG30プログラムを通してグローバルな教育改革を行ってまいりました。

特に、アジア諸国の大学との連携など長期間にわたる地道な努力の成果は、ASEAN諸国における指導的立場に就いた本学出身者の輩出や地域の人々との深い信頼関係の醸成となって実を結んでおります。今後も世界有数の大学の1つとして発展を続けるためには、名古屋大学環境方針に述べられた社会的責任と環境コミュニケーションの精神を守り名古屋大学学術憲章の理念を達成することが必要です。このような思いから、改革と発展が新総長にスムーズに引き継がれるよう、本学が関係する持続性と社会的責任についても積極的に公表し改善に努めてまいります。

2014年7月

■ 環境方針

名古屋大学は、その学術活動の基本理念を定めた「名古屋大学学術憲章」において、「自由闊達な学風の下、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする」と記している。名古屋大学は、この学術憲章に基づき、文明の発達や現代人の行動が未来の世代に与える影響の重大さを認識し、想像力豊かな教育・研究活動による人類と自然の調和的発展への貢献と社会的役割を果たしていくために、次の基本理念と基本方針を定める。

1 基本理念

名古屋大学は、人類が築きあげてきた多様な文化や価値観を認め、次世代のために真に尊重すべきことは何かを考え、持続可能な社会の実現に貢献する。

2 基本方針

基本姿勢

(1) 名古屋大学は、環境問題の原因を究明し、これらに適切に対処していくため、すべての学術分野において、持続可能な発展を目指した教育と研究を進める。

環境マネジメント

(2) 名古屋大学は、環境マネジメントの継続的改善を図るため、大学のあるべき姿となすべき行動を関係者とともに考え、実践し、追求する。

環境パフォーマンス

(3) 名古屋大学は、自らの活動が環境に及ぼす影響や負荷を関係者とともに認識し、環境負荷の低減や未然防止に向けた総合的かつ体系的な課題解決に努める。

社会的責任・環境コミュニケーション

(4) 名古屋大学は、法令等の遵守、倫理の尊重、情報の公開、関係者とのコミュニケーションや相互理解を通して、地域社会や国際社会からの信頼を高める。

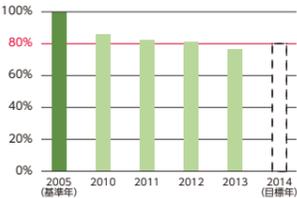


環境報告書サマリー【継続的改善のための最近の環境活動】

名古屋大学は、環境に配慮した取り組みを促進して全学を挙げて継続的に活動を続けています。それらの活動の概況について紹介します。

各種受賞を赤字で示しています。

🍃 = 前年度より改善
🔴 = 改善が必要

報告対象期間	環境管理全般	地球温暖化対策・省エネ対策	廃棄物対策	化学物質管理	市民・学生とのかかわり
2013年度  ●減災館の完成 ●学外関係者との環境コミュニケーション ●国立シンガポール大学との安全衛生管理の相互連携 ● 研究所共同館が「愛知環境賞 優秀賞」受賞  環境報告書についての意見交換会	●キャンパスマスタープラン2010に基づくCO ₂ 排出量を2005年度比で21.6%削減(目標:2014年度で2005年度比20%以上削減) 	●廃棄物処理取扱者講習会の開催(2013年6月・12月) ●古紙リサイクルによる紙ごみの削減 ◎可燃ごみ・不燃ごみ廃棄量(対前年比) 2013年度実績 東山キャンパス⇒ 0.0%→ 鶴舞キャンパス⇒ 7.9%↓ 大幸キャンパス⇒ 9.1%↓	●化学物質管理システム(MaCS-NU)の強化 ●一般高圧ガス取扱講習会のレベルアップ ●実験廃液類回収時の安全対策の向上 ◎化学物質管理システム登録率⇒100%	●騒音対策(防音ルーバー、防音壁)を設置 ●環境サークル「Song Of Earth」の活動  「Song Of Earth」の活動	
2012年度  ●研究所共同館の完成 ●学外関係者との環境コミュニケーション ●国立シンガポール大学との安全衛生管理の相互連携 ●環境安全衛生講演会 	●名古屋大学の環境安全推進本部会議にて、環境行動計画の承認 ◎温室効果ガス排出量(CO ₂ 換算、2009年度比) 2012年度実績 東山キャンパス⇒ 1.3%↓ 鶴舞キャンパス⇒25.2%↓ 大幸キャンパス⇒33.9%↑	●廃棄物処理取扱者講習会の開催(2012年6月・11月) ●古紙リサイクルによる紙ごみの削減 ◎可燃ごみ・不燃ごみ廃棄量(対前年比) 2012年度実績 東山キャンパス⇒12.6%↓ 鶴舞キャンパス⇒ 2.7%↑ 大幸キャンパス⇒15.6%↑	●化学物質管理システム(MaCS-NU)の強化 ●高圧ガス管理システム(MaCS-G)の本格始動 ●MaCS-NU およびMaCS-G講習会の開催(2012年5月・6月) ●長期滞留ボンベ返却に向けての調査 ◎化学物質管理システム登録率⇒100%	●騒音対策(インバーター制御に交換、カバーの設置)を実施 ●環境サークル「Song Of Earth」の活動  ごみ拾いでエコより	
2011年度  ●エコ大学ランキング 全国1位 ●2011年度「省エネ大賞 会長賞」受賞  エコ大学ランキング全国1位	●東日本大震災を受けて、総長から、さらなる省エネ施策の推進を強化するために発した「エネルギー使用に関する緊急声明」を掲載し、省エネ推進の協力を呼びかけ ◎温室効果ガス排出量(CO ₂ 換算、2009年度比) 2011年度実績 東山キャンパス⇒ 5.0%↑ 鶴舞キャンパス⇒24.5%↓ 大幸キャンパス⇒22.4%↑	●廃棄物処理取扱者講習会の開催(2011年6月・12月) ●古紙リサイクルによる紙ごみの削減 ◎可燃ごみ・不燃ごみ廃棄量(対前年比) 2011年度実績 東山キャンパス⇒ 2.0%↓ 鶴舞キャンパス⇒ 1.2%↑ 大幸キャンパス⇒37.7%↓	●化学物質管理システム(MaCS-NU)の強化 ●高圧ガス管理システム(MaCS-G)の導入 ◎化学物質管理システム登録率⇒100%	●環境サークル「Song Of Earth」の活動 ●COP10「社会と学術対話フォーラム」を開催  花いっぱい 開催	
2010年度  ●基本姿勢、環境マネジメント、環境パフォーマンス、社会的責任・環境コミュニケーションの4つの基本方針が見える形に環境方針を改訂 ●環境方針と大学の取組を関連づけて編集 ●環境に関連した教育・研究活動等の一覧表の作成	●鶴舞キャンパスにおける附属病院ESCO事業の実績 CO ₂ 削減量7,207t減 ●省エネパトロールの実施 ◎温室効果ガス排出量(CO ₂ 換算、2009年度比) 2010年度実績 東山キャンパス⇒ 9.5%↑ 鶴舞キャンパス⇒21.1%↓ 大幸キャンパス⇒18.4%↑	●廃棄物処理取扱者講習会の開催(2010年6月) ●古紙リサイクルによる紙ごみの削減 ◎可燃ごみ・不燃ごみ廃棄量(対前年比) 2010年度実績 東山キャンパス⇒ 3.0%↓ 鶴舞キャンパス⇒ 6.3%↑ 大幸キャンパス⇒30.0%↑	●化学物質管理システム(MaCS-NU)の強化 ●化学物質の納入時登録システムの導入(2010年5月) ◎化学物質管理システム登録率⇒100%	●環境サークル「Song Of Earth」の活動 ●COP10に関する協力活動  ごみ拾い活動の様子	
2009年度  ●CO ₂ 排出量削減のためのアクションプラン(目標:2014年度で2005年度比20%以上削減) ●2009年度「エネルギー管理功績者 中部地方電気使用合理化委員会委員長表彰」受賞 ●「環境報告書賞 公共部門賞」受賞(東洋経済新報社、グリーンリポーターフォーラム主催)	●鶴舞キャンパスにおけるESCO事業の実施 ●省エネパトロールの実施 ◎温室効果ガス排出量(CO ₂ 換算、2006年度比) 2009年度実績 東山キャンパス⇒14.1%↓ 鶴舞キャンパス⇒ 2.8%↑ 大幸キャンパス⇒ 8.8%↓	●廃棄物処理取扱者講習会の開催(2009年6月) ●古紙リサイクルによる紙ごみの削減 ◎可燃ごみ・不燃ごみ廃棄量(対前年比) 2009年度実績 東山キャンパス⇒19.8%↓ 鶴舞キャンパス⇒ 2.0%↑ 大幸キャンパス⇒14.0%↑	●化学物質管理システム(MaCS-NU)の強化 ●大学内全吹付けアスベスト処理の完了(2010年3月) ●鶴舞キャンパスの作業環境改善に着手 ◎化学物質管理システム登録率⇒63%	●「ECO LABO」プロジェクト(名チャリプロジェクト2009) ●小型家電回収実験の実施 ●騒音対策(防音パネルの設置)を実施 ●大幸キャンパスの禁煙活動	

名古屋大学における省エネルギー活動 2004年以後の主な活動

- 名古屋大学の主な活動(建築設備関連の省エネルギー対策は右記※)
- ①各キャンパス毎の毎月のエネルギー使用量・省エネ対策のホームページ公開(2004年～)
 - ②夏季および冬季省エネルギーキャンペーンおよび昼休み消灯キャンペーン実施(2004年～)
 - ③東山キャンパスにおける夏季の契約電力超過予測時の電力抑止メール発信(2004年～)
 - ④省エネチェックシートによる省エネ活動状況調査と公開(2005年～)
 - ⑤省エネ推進担当者の選任による体制整備(2005年～)
 - ⑥夏季一斉休暇(8月平日2日間)によるエネルギー消費削減開始(2005年～)
 - ⑦省エネパトロールの実施(2009年～)

※ 減災館における省エネルギー対策(2013年度実績)

- ・外壁断熱材50mm
- ・全館LED照明
- ・超高効率変圧器
- ・既設共同構を有効活用したアースチューブ設置
- ・複層ガラス採用
- ・人感、照度センサーによる照明制御
- ・太陽光発電装置
- ・自然換気システム

